

## 「『ぶどう園と農夫』のたとえ」

2014年10月23日

マルコによる福音書12章1節～12節。イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』そして、息子をつまえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、／わたしたちの目には不思議に見える。』」

彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話された気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残留して立ち去った。

上記の記述はあまりにでき過ぎている。とても、主イエスの直々の言葉とは思えない。マルコ福音書の著者は十字架と復活、そして、聖霊降臨による教会誕生とその後の教会の成長を知っている。それらを知って、この記述を書いたと思われる。旧約聖書においても、「事後預言」と言われるものがある。歴史的に起こった出来事を、それ以前の預言者の口に乗せて、預言者が語ったかのように書く記述方法である。上記はそれと同じであろう。

次のようなたとえである。神はイスラエルを愛し、生きていけるように全てを整えてくださった。その神への信仰を求めた。しかし、人間は神の守りを忘れ、したい放題のことをした。そこで、神は預言者たちを遣わし、神への信仰に目覚めさせようとした。ところが、預言者たちの言葉を疎んじ、嫌い、彼らを迫害し、殺害し続けた。神は、最後の手段として、神の子なら敬ってくれるだろうと愛する独り子を遣わした。ところが、その独り子を殺せば、全てが自分たちのものになると思い、捕まえ、殺し、放り出した。独り子とは、もちろん主イエスを指している。

独り子イエスは十字架で殺され、放り出され捨てられた。旧約聖書詩編118編22節、23節の「家を建てる者の退けた石が／隅の親石となった。これは主の御業／わたしたちの目には驚くべきこと」という言葉を引用している。家作りの専門家が無用として退けた石、即ち、宗教の専門家である祭司長、律法学者たちによって捨てられ、十字架で殺された主イエスを、隅の親石として、教会が立ってきた。マルコ福音書の著者が経験した驚くべき神の御業であった。

12節に「彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話された気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残留して立ち去った」と書かれている。殺害しようとしている神殿当局に当てつけ「ぶどう園と農夫のたとえ」を語った。受難週における主イエスは、神殿当局に一步も引かず、戦闘的に対峙している。この事実は確かである。